

目が見えない男とかゆみ イーシャ・サーデサイによる再話

暗闇が彼を飲み込みました。彼は何度かまばたきをしました——無駄なことだと分かっていた、目が慣れるはずもないのですから。その上、彼の目に残っているわずかな視力からして、この部屋には光源がなく、ランプがなく、月の光で銀色に輝く窓がないことは、ほぼ間違いありませんでした。

そう、彼は真っ暗闇の中にいたのです。暗闇と——そして静寂。パニックが胸に高まるのに比例して、どんどん大きくなっていくような自分の思考を除いて。彼は心の中で、どうして自分がここに、この暗くて窓もなく、誰の助けもない部屋にいる羽目に陥ったのだろうか、と思い返しました。

ただ皮肉なことに、この冷たくてよそよそしい部屋は、宮殿の一部でした。そして宮殿は壮大でした——風通しが良く美しく、田園風景の中に完璧な姿で建っていました。そこは彼がこれまで訪れた中で最も幸せで、最も素晴らしく、最も平和な場所であり、それはまさに彼のものでした。

そうです、彼の家族は数カ月前にこの豪邸に引っ越し、そこにいる間に、その男はそこにある多くの部屋や通路を探索するようになりました。問題は、彼が一人で、彼の既に貧弱な視力が最悪の状態になる夜に、そうするのが好きだったことでした。

今晚も同様に、家族全員が寝静まった後、忍び足で出発しました。彼は歩きながら鼻歌を歌い、記憶と直感、そして壁の燭台(しょくだい)の光でかすかに見える建物の輪郭を頼りに歩きました。やがて階段を何段か下り、地下の廊下に出ると、開いているに違いないと思われるドアに突き当たりました。彼はこのドアがどこにつながっているのか知らず、中も見えませんでした。

「恐らく引き返すべきだ」と、彼の頭の中で小さな声が警告しました。それでも、彼はそこに留まりました。この部屋には何か——謎、可能性——があり、それには拒み難いものがありました。反対する思いを払いのけ、彼は中に飛び込みました。

彼は、自分がどこにいるのかを知る手掛かりとなる何かの物体か家具にぶつかるだろうと思いながら、しばらく歩き回りました。しかし、そのようなことは起こらず、しばらくして何とか気づいたのは、かすかなかび臭さだけでした。

すると、彼の後ろの方から、それは聞こえました。カチッと言う音です。彼はドキッとしました。それは紛れもなく、ドアが閉まる音でした。

こうして彼は、目が見えず暗闇の中で、すぐに出口のない見知らぬ部屋にいることになったのです。彼は深く息を吸い込み、胸を越えて喉の奥まで湧き上がってきた恐怖を鎮めようとしてしました。幸いなことに、彼の思考は十分に静かになり、それを何か役立つものにお膳立てし始めることができました。「計画を立てることだ」と、彼は思いました。「私に必要なのはそれだ」

もちろんまだドアはあったので、逃げ道はありました。そしてここは閉ざされた空間だったので、最終的にはそのドアを見つけることができることを意味しました。彼は真っ黒な闇の中に腕を伸ばし、手探り、手探りしながら前に歩き始めました——

ピシヤ。

「ここだ」と、男は満足げに思いました。壁の一つにたどり着いたのです。あとは、ドアに来るまで、手を壁に沿わせながら一方向に注意深く歩くだけでした。それはとても簡単に思えました。

彼は1歩、そしてもう1歩、さらにもう1歩、さらにもう1歩と、冷たいセメントを指でなぞりながら進みました。その部屋は明らかにかなり広いものでした——壁はしばらく続いているようでした。やっとのことで隣の壁と接する角までたどり着いた時、彼はまた同じことを繰り返さなければなりませんでした。今、彼はドアにたどり着くことを願って、この新たな壁に沿って感触を確かめていました。

こうしてしばらくの間、彼は続けました。しかし、彼は楽観的でした——ドアに近づいていることを確信していました。もう長くはかからないだろうと思いました。

鼻がわずかにチクチクするのに気づいたのは、まさにその時でした。突然のかゆみ。

彼は反射的に鼻にしわを寄せ、起こっていることを無視しようとしたましたが、かゆみは強くなるばかりでした…さらに強く…そしてもっと強く。かくまいと懸命に努力して、彼の目は潤み始めました。両手はいまだ壁の上にはありましたが、彼の注意はそがれてしまいました。彼が考えられるのは、かゆい鼻のことだけです。その感覚は耐え難いほどで、すべてを飲み込むようです。

「これは、かくしかない！」彼は切羽詰まって、誰もいない部屋に向かって叫びました。

結局、彼はそうしました。両手を壁から離しました(片手でもかくことができたのかもしれませんが、彼は決して健全なマインドの状態にありませんでした)——そして、彼は心ゆくまで鼻をかきました。彼はそうしながら歩き続け、もはや自分がどこに行くつもりだったのかを気にも留めませんでした。

「ああ」と、鼻のかゆみを十分にかいた後、彼は言いました。彼は両手を壁に戻すと、搜索を再開しました。

さらに時間がたちました。それがどのくらいだったか、男には分かりませんでした。「そのまま進め」と、男は自分に言い聞かせました。「もう少しだ」

そう思った時、チクチクする感覚が戻ってきました。ただし今回は、ふくらはぎでした。再び、男はかくのを我慢しようとしたましたが、抵抗すればするほどかゆい面積は広がっていくようでした。やがて、ふくらはぎだけでなく、脚の他の部分までかゆくなったのです！ 永遠に続くと感じた拷問のような我慢の後、彼は降参して壁から両手を離し、地面にしゃがみ込んで狂ったように脚をかきむしりました。

かゆみがようやく治まると、男は再び立ち上がりました。彼は適当に方向を選び、壁を触り続けました。「今度こそ」と、彼は思いました。「絶対にドアを見つけよう」

そのように、彼はさまよい続け、かき続けました。最初にかゆいのは、ここでした。次はここでした。こちら側がかゆくなったと思うと、あちら側もです。かゆい。かく。かゆい。かく。何度も何度も男は周り、彼の脚と同じくらい、彼のマインドも無我夢中に駆け回りました。

自分で作り上げたその騒動の間、男はドアを素通りし続けていることに気づきませんでした。部屋を周回している間に何回かは、彼の指がドアの端から髪の毛 1 本分の所まで近づきながらも、新たなかゆみに気を取られてしまったのです。

外では太陽が昇り始め、宮殿を暖かさと光で満たしていました。しかし、男はこのことも知る由もありませんでした。男は疲れていました。錯乱していました。その地獄のような部屋に閉じ込められ、両手を壁にむやみやたらに伸ばし、歩いたりはいずったり、かゆがったりしながら、どこにも行けなかったのです。

古代インドの賢人たちは、探究者たちが自分の感覚のとりこになること——自分の中に湧き上がり感じるあらゆる欲望に、何も考えずに屈すること——に対して警告しています。そのような人はかゆみを抱えた目が見えない男とかわらないと、賢人たちは言います。

この物語は、インドのヴェーダーンタ哲学の古典的な物語に基づいています。



© 2024 SYDA Foundation®.著作権所有。